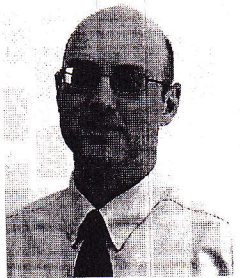


# 日本外交を強くする

# 論

外交とは、その国が世界でどういう役割を果たしたいのか、という国民の願いと無縁ではありえない。日本をどういう国にしたいのか。すべての問いは私たちに帰ってくる。日本外交の再生はそこから始まる。

## 米への異議や拒否恐れるな



68年生まれ。東京大、米ハーバード大の客員教授を歴任。英国日本研究協会会長。専門は日本外交・安全保障。著書に「日本の再軍事化」(英文)など。

クリストファー・ヒューズさん

民主党政権の外交が激しい批判にさらされている。民主党は、自民党政権が米国に過剰に依存して中国を敵対視していたと批判し、自立外交を掲げて政権に就いた。ところが、米国と対等の発言力を持つことが試みは普天間問題で失敗し、尖閣諸島をめぐる日中の争いの結果、日本の米国依存はかえって高まった。中国との新たな協力関係を維持することもできないし、北朝鮮外交は打開できず、日韓関係も領土問題で後退した。「日本外交の崩壊」が懸られるありさまだ。

自民党や外交評論家たちは民主党の無能が証明されたのだと言いたいだろう。自民党が過去に敷いた路線に戻るしかないと言っている。だが、彼らは主張する。だが、そうだろうか。

英ウォーリック大教授

小泉純一郎首相以後の自民党の路線は、同盟強化を求める米国にともかくついていく「しおしおながらのアリスム」だった。しかし、その都度の要求にこたえる近視眼的

外交には、長期的な視点がない。その限界を示しているのが普天間問題だ。日米両政府は、沖縄県民が基地を受け入れないという政治的現実を認めようとし、新たなアイデアで日米同盟を再編するしか、同盟の正当性を確認し、安定させる方法はないのだから、それを拒否している。それでも、日本外交の存在感を高めるには日米同盟を通すしか手段はないと考える人が、民主党内にさえ増えている。しかし、安全保障を米国に依存すれば依存するほど、日本はシレンマに陥るのだ。米国の一方的な戦略に巻き

込まれるのではないか。いざというときに米国には見捨てられるのではないか。米国の意図をめぐって疑念にさいなまれることになる。対米依存に戻すしかないという考え方は、「いらだち交じりのアリスム」に行き着き、同盟を不安定にするだろう。日本が取るべき道は、この二つのアリスムではない。国際政治の流れ、日本のパワーと本質的な国益を規定する「現実主義的なアリスム」へ進むべきだ。新しい防衛大綱は遠回しに、東アジアで米国の影響力が低下し、多極化に向かっていると認めて

いる。ならばその新しい環境を踏まえた政策を打ち出すべきだ。安全保障と経済で利益を共有する米国との同盟を継続するのは当然だが、重要な問題で米国に異議を申し立てることを恐れてはならない。英国はフシユ政権に追従してイラク戦争に参加した。米国が無謀な冒険主義に陥るとき、こびへつらうことは同盟国の役割を果たしたことになる。むしろ拒否することが良き友人の役割だ。日本は米国一辺倒でなく、東アジアで台頭する大小様々な国とも戦略的関係を強めねばならないし、中国と共存す

る道を見いださねばならない。中国との戦略的競合関係が完全に消えることはないが、中国を東アジアの地域統合に取り込む多國間の枠組みを築く一層の努力が必要だ。民主党本来の外交ビジョンはこの「現実主義的なアリスム」から遠いものではないはずだが、国内政治の混乱から実現できないでいる。ここで米国への安易な依存に戻ることは短期的には容易な道だが、長期的には日本外交の失敗を招く。たとえ困難なシグザグの道でも外交の自主性を高める方向に進むべきだ。(翻訳・構成 三浦俊章)



グラフィック・戸田 靖人 / The Asahi Shimbun